第１回「奄美地域　地域振興の取組方針」見直しに係る地域懇談会　【概要】

１　日時
令和４年７月12日（火）　午後２時から午後４時まで
２　場所
大島支庁本館４階大会議室
３　参加者
(1)　有識者委員
・春利正　委員　（前天城町教育長）
・麓憲吾　委員　（(有)ｱｰﾏｲﾅｰﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ代表取締役，NPO法人ディ代表理事）
・向井扶美　委員　（社会福祉法人三環舎理事長）
・喜島浩介　委員　（奄美大島エコツーリズム推進協議会長）
・美延睦美　委員　（NPO法人徳之島虹の会事務局長）
・石田秀輝　委員　（地球村研究室代表，東北大学名誉教授）
・山腰眞澄　委員　（(株)ねりやかなや代表取締役）
・田畑克夫　委員　（与論町商工会長，NPO法人海の再生ﾈｯﾄﾜｰｸよろん代表）
・前田浩寿　委員　（鹿児島県建設業青年部会奄美支部支部長）
・伊村達児　委員　（伊村農園代表）
・奥田忠廣　委員　（奄美群島水産振興協議会長，奄美漁業協同組合筆頭理事）
※　代理出席：満林春男副会長
・惠枝美　委員　（奄美大島商工会議所副会頭，NPO法人まち色事務局長）
・武下義広　委員　（(一社)奄美群島観光物産協会統括ﾘｰﾀﾞｰ兼観光部ﾘｰﾀﾞｰ）
・勝眞一郎　委員　（サイバー大学IT総合学部教授，県DX推進アドバイザー）
・新川康枝　委員　（大島支庁長）

※書面による意見聴取
・宜名真孝子　委員（奄美群島地域女性団体連絡協議会　会長）　事務局代読

※委員15名参加（うち代理出席１名），１名書面による意見聴取
※オブザーバーとして９市町村が参加

(2)　大島支庁

４　議事内容
(1)　「地域振興の取組方針」見直しについて
(2)　意見交換(奄美群島の目指す姿等)
(3)　その他

５　公開・非公開の別
公開

６　傍聴者
０名

７　主な発言について

１　春利正委員（前天城町教育長）

・全ての分野において人材の育成が急務であり課題。
・奄美群島の各学校・各市町村で特色あるすばらしい教育実践がなされている。しかしながら児童生徒数は減少し，小規模校も増える傾向にある。少人数だと教育活動の範囲も限られてくるのではないか。可能であれば市町村を超えた，広域的な教育活動が必要だと考える。持続可能な広域的な教育活動の推進が必要ではないか。
・広域的な教育活動の推進によって，素晴らしい奄美の良さを子供達に受け継いでいってほしい。

２　麓憲吾委員（(有)ｱｰﾏｲﾅｰﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ代表取締役，NPO法人ディ代表理事）

・３年前，島唄の唄者は土日のみならず平日も唄い疲弊していた。観光サイドの視点だと「唄者が島唄で飯が食えるようにするにはどうするか」となってきがちだが，そもそも島唄は，集落コミュニティで生まれた生活文化が数百年続いてきたもので，聞き手（お客）と演者との境目がないものだ。そこが間違ってハンドリングされてしまうことを危惧している。
・島のアマチュアイズムという生活文化の唄と踊りとをどうコーディネート・マネジメントしていくのか，重要な岐路に立たされている。
・コミュニティで培われたものが唄や踊りとして表れ，芸術文化としての価値がでてきた。守るべきものが何かを考えながら，次世代にどうつなぐか。「シマのアマチュアイズム」を作れる環境のプロ，第三者的にマネジメント・ディレクションできる人をつくっていくことが大事だ。

３　宜名真孝子委員（奄美群島地域女性団体連絡協議会　会長）※事務局代読

・出産・子育てする喜界町の若い世代から，離島は様々な面で「選択肢が少ない」という声がある。
・出産に関して，喜界島・与論島では地元出産の選択肢すらない。妊婦はフェリーや飛行機に乗る際に条件があるため，奄美市や鹿児島市の宿泊施設で１人で１ヶ月過ごし，出産を迎えることが多い。
・現在の出産環境において，地元で出産する妊婦をフォローするには市町村単位では難しい，少しでも出産への不安を解消できる取組があれば良い。自分も思い悩む日々を過ごしたが，同じことで悩む時代ではないと思う。

４　向井扶美委員（社会福祉法人三環舎理事長）

・長寿の島ではあるが働き盛りの早世率が高い。若い人達の健康を維持する取組を，地域ぐるみで進める必要がある。
・結婚したいけど出会いがない，積極的に動いていないという30歳から40歳の方が多いようだ。周りもなんとかしたいと思っており，結婚支援に取り組む必要がある。
・不妊治療を受けている人も多く，妊活のために仕事を続けられない人，治療のため鹿児島まで行く人もいる。
・離島だと教育費の負担が大きく，子供を大学にいかせるために借金するという声も聞く。離島での賃金水準の向上への対策ができればと感じる。
・発達障害に関する早期発見・早期支援はできつつあるが，小中学生の相談が多い。大人まで医療・福祉での切れ目のない支援体制が必要だ。

5　喜島浩介委員（奄美大島エコツーリズム推進協議会長）

・森の中に人間や車が入れば外来種もくっついてくる。駆除しなければならないが，まずは群島内の外来種の分布状況をつぶさに確認する必要がある。現在，ボランティアで対応しているが，その段階ではない。重機を使って有償でやる必要があり，世界自然遺産の中でのシステム・仕組みとして徹底してほしい。
・世界自然遺産登録から一年が過ぎ，ガイドも知識と認識を啓蒙し直さないといけない。世界自然遺産の島の中でガイドをやっているという認識，未来志向で将来私達はどこに行くのかということをもう一度考える必要がある。

6　美延睦美委員（NPO法人徳之島虹の会事務局長）

・人と自然のあり方がうまく調和して，長く伝えていければ世界のモデルになるのではないか。
・住民による取組も不可欠。住民の役割が非常に大きくなる。
・世界自然遺産は観光振興だけではない，徳之島は農業の島であり，島民全員が恩恵を受けている。農業振興につながらなければ世界自然遺産は必要ない。
・自然環境保全にあたって建設業の役割が非常に重要になってくる。
・世界自然遺産に関わる課題は全て「人」が原因。一方で世界自然遺産は人を育てる絶好の場になる。一人一人が自立して，自分たちの島は自分たちで守り，島を切り開いていく。そのために人材育成が必要ではないか。

7　石田秀輝委員（地球村研究室代表，東北大学名誉教授）

・奄美全体として，自然が豊かで人も素敵，コミュニティもまだかなり残っている。
・2040年頃に消滅してしまう自治体が奄美群島にはたくさんある。人口減少や財政，エネルギー資源の高騰，食糧の価格高騰，自然災害の増加，文化・伝統の劣化といったことが挙がってくるが，これを正面から受けて離島だからこそ憧れになるような離島モデルを作るべき。そのためには人口減少という制約を肯定するバックキャスト思考で考える必要がある。
・域外にお金が流出していることに我々はすごく気をつけなければならない，沖永良部は農業の島だと言われているが，農業人口は2040年には40%になってしまって持続できない，こういうところの本質的な問題の議論がまだまだ少ない。
・バックキャストの視点に立って沖永良部での未来図を描くとすると，「小規模多機能自治」，「いろいろなものを自足する」，「島人が島の自然・文化を学びなおす」，「歳をとるのが楽しい暮らし」が柱となる。
・都会は日本の未来を作っていくのはとても難しい。そういう意味では我々は非常に良い位置にいる。

8　山腰眞澄委員（(株)ねりやかなや代表取締役）

・奄美群島に住もうと思う人たちは１万人程度。島に住みたいと思う人たちの最大の課題は仕事探しではなく「家探し」。
・空き家はたくさんあっても，貸さない，貸せる状態にない物件ばかり。
・住民票を移さない人たちも増加している。10万人を切ろうとしている奄美群島に住民票を持たない人が１割程度来ると行政サービスが成り立たなくなるのではないか。
・空き家では無く分譲地に人口が流動している状態。本当に大事にしなければならない地域コミュニティが失われていくことを危惧している。

9　田畑克夫委員（与論町商工会長，NPO法人海の再生ネットワークよろん代表）

・生活物資に運賃がかかることが離島のハンデ。
・条件付き運航や抜港もあり，移動手段の遅延も当然というマインドになっている。日配品などは与論の業者が着払い料金で負っており，移動の負担全般を島民が抱えている。喜界でもそうだと思う，奄美群島全体で考えてほしい。
・空き家問題では，家の中に神棚があり他人に貸したくない人もいる。人口減少を解消するためにも，対処していかなければいけないという課題は共通にしてある。
・世界自然遺産に関して沖縄との連携が必要。

10　前田浩寿委員（鹿児島県建設業青年部会奄美支部支部長）

・奄美大島島内で最終処分場が無くほぼ廃棄物を鹿児島に運搬して処理していることは喫緊の課題。運搬費用の高騰により不法投棄が起きることを懸念している。
・建設業は農業などとも密接に関係している。他の産業と連携を図ることが一番大事だと考えている。
・労働力の不足はもう目の前。今すぐ人口が増えるわけでもなく島外から来るわけでもない。外国人労働者，外国人技能実習生の受入環境を整える対応を行政と連携して進める必要がある。

11　伊村達児委員（伊村農園代表）

・エネルギーや飼料の高騰により生産コストが上がり，近年は農業が厳しい状況。
・島で盛んな畜産業を活用して肥料を作る，焼酎や糖蜜の搾りかすなどを使って農耕飼料を作るなど，島にあるものをうまく利用して循環型農業を進めることが大切になってくる。
・高齢化も大きな問題になる。平均年齢が70歳代であり，あと10年たてば３分の１は農業ができなくなるのではないか。高齢化に対応する方策として機械化があげられる。さとうきびは収穫の負担を軽減するハーベスターを字ごとに導入するなどして栽培面積を維持できている。
・高齢化した農家が今後どこまで踏ん張れるか。ある程度の規模を維持していくことが，奄美群島全体の市場を維持していくことになる。
・一つの農家に機械があるのではなく，例えば字単位で数台あるなどの形で機械化をどれだけ進めていけるか。高齢化を止める一つの手段ではないか。

12　奥田忠廣委員（奄美群島水産振興協議会長，奄美漁業協同組合筆頭理事）

※　代理出席：満林春男副会長

・水産業を取り巻く課題として，藻場や資源の減少，価格低迷の長期化，燃料高騰，高齢化による後継者不足などがある。
・資源・人・施設を維持していく必要がある。
・シラヒゲウニや夜行貝など奄美特有の種苗生産施設の設置を検討いただきたい。

13　惠枝美委員（奄美大島商工会議所副会頭，NPO法人まち色事務局長）

・自然環境とのバランス確保とともに，世界自然遺産登録の効果を群島全体に広げることが課題

・世界自然遺産登録は観光振興にとって大きなビジネスチャンス。観光振興を図っていくために，環境保全とのバランスや登録効果を群島全体に広げることが課題。全ての実現は難しいが，インバウンドやＳＮＳ対策，多言語対策など受入体制の構築し，ターゲットを絞る必要性がある。世界自然遺産登録はゴールで無くスタート。
・二次交通の問題もあり，高齢者のみならず，最近では免許を持たない若者も増えている。レンタカーが足りなかったりする。
・子育て面でいうと，働きたいが保育所が足りない，大学に行かせたいが経済的に難しいという声を聞く。運賃軽減を鹿児島だけでなく福岡などにも広げてほしい。

14　武下義広委員（(一社)奄美群島観光物産協会統括リーダー兼観光部リーダー）

・奄美群島においても，他の地方都市と同様に労働力人口の減少が起こっている。農業・製造業においても就業者の人口減少が進んでおり，後継者の育成などしっかり行う状況にある。
・観光業については，沖縄県では観光客が1,000万人を超え，観光収入は6,000億を超えた。観光業は総合産業で裾野が広い。観光業が活性化することで若い世代が増え，Ｉターン等も期待できる。だが，コロナ禍で消費が抑制されており，入込客数も伸びていない。コロナ禍での中での観光の仕組みを作っていく必要がある。
・アフターコロナとなれば自然と観光客も増えていくが，その時にオーバーツーリズムにならないように注意しなければならない。エコツアーガイドの育成やレスポンシブルツーリズム，環境に負荷をかけない二次交通なども課題だ。

15　勝眞一郎委員（サイバー大学IT総合学部教授，県DX推進アドバイザー）

・ビジョンをプロジェクトマネジメント的に解釈すると，2033年に島民が到達したい旅の目的地と到達のしかたを示した「旅程表」といえるだろう。県庁職員を含む島民全員にとって「奄美群島らしいもの（旅）」にしよう。今のだと，どこの県でも使えそう。
・そこで，各郡島民が，自分たちの立ち位置や役割を考える必要がある。かつての都市一極集中や大量生産で地方が疲弊し，弊害が出てきた過去から，我々がかろうじて守ってきた集落単位の活動や地域経済循環に振り子が戻っていると感じる。そういった目的地やたどり着くやり方を変える必要がある。
・本土並みを果たした復帰後70年を「復帰世」として，次の「シン・奄美世」を描いて実現するよう将来像を描こう。
・デジタル庁が牽引するデジタル化を含むそれ以外の政府の施策も，「都市集中＆小品種大量生産」から「地域分散（田園都市）＆多品種少量生産」へ向かう施策の方向性である。その中では，集落単位の地域コミュニティをベースとした地域循環（サーキュラーエコノミー）とそれらをつなぐネットワークという考え方が主流になりつつある。

８　今後について

今回いただいた御意見等を踏まえ，取組方針の案を作成し，10月開催予定の「第２回地域懇談会」にてお示しする予定。　※別途御案内予定

以　　上